

【雪の深山に黄鳥の初音】 俗説の雪山を出た釋尊に、太子の尊容を譬へて、其聲音を雪山の黄鳥の初音と云ふた。(國性爺の四)

【雪は鷲毛に似て云々】 白氏文集にある「雪似三鷲毛一飛散亂、人被三鷲毛一立徘徊」鷲は色の白い鳥、鶴は鶴の毛衣、徘徊は行きつ戻りつ歩むこと。

【雪は五穀の精】 雪は豊年の貢と云ふと同義、春秋元命包に「陰凝りて雪となる、雪は五穀の精なり」。

【雪間に素足云々】 情け口説も其處から萌え出そうな、白い素足で歩む毎に焚きしめた伽羅の匂ひがすると云ふ義。(壽門松の上)

【雪やこんと云々】 子守唄の一節。(佐々木の三)

【行衛定めぬ旅なれば云々】 以下謡曲「鉢の木」の文を多く用ひて居る。(最明寺殿の下)

【行川の流れば絶えずして云々】 以下、水の泡に似たりけりまで、鴨長明の方丈記にある冠頭文。(龜谷の三)

【行先目的が立つ】 行く先々に對して對目的が立つて、其對の矢に射當てられるを云ふ。

【行く虎の尾張の國】 虎は骨清の勇猛を表はし、獅子、龍に對し、更に「虎の尾を踏む」と云ふ冒險の心持から尾張の國と續けた。(出世景清の一)

【行く水に數かく云々】 古今集「行く水に數かくよりもはかなきは、思はぬ人を思ふなりけり」とある、はかなく、詮なきこと之意。

【行くもちんつ云々】 流行唄なり、ちんつは今で言ふ眞猫とか二人連れとか云つた意、男女の特に親密なのをちんつと云ふは大阪の方言である、行く人歸る人來る人の皆ちんつづれなる風俗觀察するに足る。(女殺の上)

【行くも山崎歸るも山崎】 増補松の落葉卷三、山崎通ひの改作との説がある、もと俗曲海道下りの替歌であるところから、「海道」の節付になつて居るらしい。

【湯桁】 温泉の周囲のかこひ。

【遊山せん】 一服息まん、一と遊びせん。

【由旬】 印度の里數の名、一由旬は四十里又は三十里に當ると云ひ、或は大由旬は八十里、中由旬は六十里、小由旬は四十里とも云ふ。

【櫻桃】 豆大の圓き實、味酸く甘し。

【泔杯】 泔は髪を洗ふ水、泔杯は、それを盛つた器(土器、後には銀器漆器)、俗に「びんだらひ」と云ふ。

【ゆだのたゆた】 大にたゆたふこと。

【ゆたん】 油單、櫃などの上を被ふもの。

【湯出器】 湯を入れる容器。

【弓槻】 大和國弓槻山。

【ゆづの爪櫛】 湯津爪櫛、齒の數の多い櫛の稱、伊井諸命が黄泉醜女に追はれ給ふた時、みづらに挿させ給ひしゆづの妻櫛を引抜き投げ棄て給ふと古事記にある、俗に櫛の齒の折れるを忌む慣習は是れから始ると云ふ。(女殺の中)

【讓葉】 古葉が新葉と正しく代つて落ちる様、親子相讓る義にとつて、新年の祝儀用とする。

【湯桶に水をつぎかけ】 湯桶は湯注ぎ器、水責の拷問なり。

【湯殿山のつまがくれ】 湯殿山は羽前國東田川郡、湯殿山神社がある、つまがくれは名産の酒。

【湯殿はじめ】 初風呂のこと。

【湯とも水とも分け難し】 胎内の兒の生き死にを案じる喻。

【湯女】 温泉場で客に給仕する女。

【湯尾峠の孫杓子】 湯尾峠は越前國南條郡にある、峠の茶屋に痘瘡を輕ふする咒の孫杓子を出す。(反魂香の上)

【湯の子とも思はぬ】 湯の泡とも思はぬ、齒牙にかけぬこと。

【湯のだんご】 當時の流行唄、しよんがゑ節らしいと云ふ。(女腹切の中)

【弓場殿】 禁中の御殿、射場殿とも云ひ、弓を射る場所。

【指果報】 徳伴のこと、生花などの用語に「出來も不出來も指果報」など云ふ。

【指人形】 小さな人形、指先などに着けて操り遊ぶ。

【指貫】 裁縫の時針尻のあたる指にはめる、指はめ。

【夕顔の花を造る】 「源氏物語」光君と夕顔の上のこと、菖蒲云々も此縁語。(大原問答の三)

【結城の土民】 下總國結城の百姓。(大磯虎の五)

【夕さり】夕されと同じ、夕暮のこと。  
 【夕立の雲の絶間云々】風雅「夕立の雲とびわくる白鷺の翼にかけて晴るゝ日の影」による。(天智の四)  
 【夕晨の憂き勤め】「迷ふ数々の」までが間の山節の文句。(夕霧の下)  
 【夕旦の薄霧も云々】以下「戀に捨てなば惜からず」まで相の山の唱歌。(三世相の二)  
 【夕晨の鐘の聲】以下「是が冥途の友となる」までが相の山節、此節は伊勢國間の山にて唱ひ出した俗曲、僧行基が、世人に無常を示そう爲に唱歌數首を作り、比丘尼に歌はしめたが始めと云ふ。(夕霧の下)  
 【夕の座敷の初対面、今日の貰ひを言ひ直す】今日揚屋からの傾城の貰ひを受け取つて置いた處、昨夜の初対面の客の居續けに今日の貰ひを斷り詫びねばならぬ、その遣手の氣苦勞を云ふたので、貰ひとは、今の「お約束」と云つた廓詞。(三世相の二)  
 【夕見草】心の異名。  
 【弓を伏せる】弓を伏せて置き、服従の心を表はす。  
 【弓頭】弓組の長。

【弓籠手】弓の弦の當るのを防ぐ小手。  
 【弓力も無あらん】弓力もさぞ衰へたらんの義。(千四 大の三)  
 【湯水とられて】死際の介抱のこと。  
 【弓鐵砲も叶はぬ】とても力に及ばぬとの喩。  
 【弓の牙】弓の牙木。  
 【弓は三つ物】騎射の三式、流鏑馬、笠懸、犬追物。  
 【弓も引方靱の客】提灯を持つと同義、大のヒイキ、弓から靱にかける、靱は新町の北に當る干物問屋などある町。(傾城酒吞の四)  
 【弓矢の禮儀】武士なら弓矢の禮儀とも云ふべき廓の掟のことを云ふ。(淀鯉の下)  
 【夢合】夢の吉凶を占ひ合はせること。  
 【夢合 夢判】夢の吉凶を占ひ、判斷解釋すること。  
 【夢をさまさんばくらうの】獲は夢を食ふとの俗説から、博勞町の稻荷にかける。(曾根崎心中)  
 【夢か七つか】夢かうつゝかに掛けた詞、七つとは夕方時刻(午後四時)にて、俗に「七ツ下り」の略語、衣類の染色の褪めたのを夕暮に喩へて言ふたの

で「なゝつさがり羊羹色の黒羽二重」など云ふ通り、身すばらしい伊左衛門の姿を見て、思はず出た言葉。(夕霧の上)  
 【夢介】夢中になつて熟眠する者の仇名。  
 【夢路怪しき】此場は夢の段ゆゑに云ふ。(松風村雨の三)  
 【夢違ひの神事】悪夢など見た時、まじなふて災禍を免れる祈禱の神祭り。  
 【夢ちがへ】悪夢を善夢に呪ひ變へること。  
 【夢路は六つ】六夢を云ふ、列子に、正夢、愕夢、思夢、寤夢、喜夢、惧夢と。  
 【夢殿】大和國法隆寺境内にある堂、聖徳太子が夢に托して佛法を説かれた處と云ふ。  
 【夢殿】大和法隆寺斑鳩御所の中央にある太子の三昧入定の所、八角造り各面二間半の堂である。(聖徳太子の一)  
 【夢にだに夢さへ云々】親の生顔夢にも見ず、又我々の姿を、夢にも親に見せないこと。(今宮心中の下)  
 【夢にだも周公を見ず】孔子の言、論語に「甚矣也、

吾衰也、久矣吾不三復夢見周公」。  
 【夢の浮橋】夢路の意、昔、大和國吉野川の夢の和太と云ふところに渡した浮橋から、轉じて夢の意になつたと云ふ。  
 【夢の浮橋や】こゝの意は熟睡すること。(百合若大臣の二)  
 【夢の浮橋六十帖云々】以下は源氏物語の帖の名に因んだ文、六十帖は其卷數、十帖は宇治の卷數。(淀鯉の上)  
 【夢の通路】夢中に戀人に逢ひに行こうとて通ふ路。  
 【夢の間惜しき春云々】論曲「熊野」の文を採る。(本領の二)  
 【夢人】夢の中の人。  
 【夢見草】櫻の異名。  
 【ゆめくしい】あつさり、淡い、水つぽいこと。  
 【湯もじ】湯文字、女の下帯。  
 【湯元】紀伊國熊野湯の峯。  
 【湯やら水やら云々】男とも女とも分らぬこと。  
 【ゆゝしい町人】立派な名ある町人。

【由良の岬】 紀州有田郡門前村興國寺の濱にある。

【ゆらり〜】 悠々。

【揺りかけ道中】 身を揺りて歩むこと。

【ゆりて】 許されて。

【許せかお馬か云々】 許してくれと云ふか、一生下馬になるかの意、これは群馬の遊ぶ圖を指したのであらう。(兼好法師の上)

【緩りくわんす】 緩りくわんに鎌子をかける。(壽門松の上)

【弓杖】 弓丈、一張の弓の長さを稱する、即ち七尺五寸、二杖は一丈五尺。(佐々木の一)

【弓杖三杖】 弓の丈三杖のこと、一張の弓の長さは巳

が手尺にて七尺五寸を法とす、其三杖は其三倍の巨離。

【瘧疾の法】 諸疫病退治の行法。

よ

【好い酒】 酒癖のないこと。

【好い手】 好敵。

【ようあたゝかに】 この下に、そうはさすまいの語のあるべき筈を省略してゐる。

【備帷子】 殉死者の代用に死者と共に埋葬した人形を備と云ひ、其人形の着た帷子のこと。

【ようござりま】 「御機嫌よう、御無事で」などの挨拶詞「ようござりました」の約語、廓の粹訛りなり。(天網島の下)

【雍州の都】 支那、今の陝西省西安府一帯の稱、此處には支那雍州を山城國に比し、雍州の都長安を、山城の都京都に比べて云ふたもの。

【用心時】 盜賊等の警戒をする時間(夜中)。

【酔うたん坊】 泥酔者の事を云ふ上方語。

【用人衆】 家老の次位の役人、金銀出納など掌る。

【ようりらし】 楊柳子か、不詳。

【與右衛門】 鳥原の門番は代々與右衛門と呼んだ、其二代目の後胤。(反魂香の中)

【世を厭ふ人とし聞けば云々】 西行法師に答へた遊女妙の返歌、新古今「世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ」に據る。

【よを込めて】 吳竹の縁語節(よ)と、夜とをもちる、夜の内にとの義。(賢女手習の四)

【譽號】 淨土宗にて五重相傳を受けた者に譽の一字を授け法名に付けさせるのを云ふ。

【世が泥の海】 天地の覆る喻。

【よかんなり】 善し〜の意。

【好衣着たる商人】 うまい商賣と云つた意、盗人などの代名詞にも使はれてゐる。(隅田川の三)

【よき衣着たる商人云々】 古今集の序に「文屋康秀は詞たくみにて其さま身におはず、いはゞ商人のよき衣着たらんが如し」とある。(二枚繪の下)

【欲界の四王忉利天】 須彌山の内、欲界六天の中の第一、四天王(帝釋に仕へる四天王、別に註せり)と、

【同第二の切利天】(この天の喜見城には天女充滿する)。

【欲界の六欲天】 欲界の衆生は、悉く食欲、色欲其他の欲に耽溺する故に名付ける、六欲天とは、欲界の天に六種の別がある、即ち四王天、切利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天のこと。

【欲生我國】 我國とは彌陀の國、即ち極樂淨土に生れんと願ふこと。

【翼軫鬼柳星張星】 二十八宿中、南天にあるもの、稱。【欲天の阿修羅王】 欲天は、六欲天と稱し欲を以て充たされた世界、阿修羅王は常に梵天帝釋と戦ふ魔神の類。

【慾若に御萬歳】 萬才唄「徳若に……」のもちり。(夕霧の上)

【余計】 剰余の意の俗語。上方詞。

【横掛】 横様に引つかける。

【横紙】 横紙破りなど云ふ、反抗的に妨害する意。

【横切れに】 横筋かいに、逸散走りの形容。

【横座】 横向きの座席、即ち上座のこと。

【餘吾將軍】 平維茂のこと、平貞盛の第十五子ゆゑに云ふ。

【世舉て皆濁れり云々】 有名な屈原の言、「舉レ世混濁而我獨清、衆人皆醉、而我獨醒」を云ふ。

【横投】 横様に投げる。

【横波かけて】 横槍入れること。

【余吾の湖】 賤ヶ岳を隔て琵琶湖と應ずる小湖。

【横梯子】 梯子を横に倒したるもの。

【横堀】 堅に乗るやら横とかけたり、西横堀の事にて、新町橋東詰の南北に通ずる濱筋。(淀鯉の上)

【横目の武士】 横目附の武士の略、武士の行動監視の役名。

【横山黨愛甲の三郎】 以下の人名は、夜討十番斬の人々の名。(加増の三)

【横連子】 横長い窓の格子。

【與作おどり】 初めて上場の際は或は松の落葉四にある與作踊を人形に踊らせ、追ひ出しとしたものかも知れぬ、次の興行の時に、此如く當り狂言「重井筒」の大意を歌音頭に仕組んで踊らせたものらしい。(丹

波與作の下

【與作丹波の馬追云々】 「與作思へば云々」と共に流行小唄を採つたので、「しゃんとさせ與作」は拍子詞。

(丹波與作の下)

【夜さ来いと……寝たところ】 お夏清十郎を唄ふた當時の流行歌。(重井筒の上)

【よさこひ云々】 お夏清十郎の「よさこひ」の唄をもちる、以下染物の雛形模様づくし。(吉岡染の上)

【夜さ、様の寝姿云々】 仮さは夜、様とは女を指す、以下は熊野比丘尼(一種の賣春婦)の小唄。(女楠の四)

【夜ざと】 目ざとく寝る。

【余座にかゝりたし】 席末に列したし、仲間に入りたし。

【與謝の社】 丹後與謝郡川守にある、豐受太神を祀る。

【預參】 參列する、參加すること。

【よしあし曳の山姥云々】 謡曲「山姥」の句。(山姥の四)

【よしゐの渡し】 備前國東大川(和氣川)の渡し、今の

御休村附近

【與州様】 與次兵衛様の通語。(壽門松の中)

【豫州判官】 伊豫守義經を指す。(將基經の二)

【吉岡紙子云々】 京都吉岡憲法は吉岡流の劍道の祖であると同時に、憲法染の創始者である、黒茶色の染め方で、紙子に應用したのを京の吉岡紙子染と稱して名高かつた、其れから玆に材を取つたもの。(吉岡染の上)

【吉岡紙子染】 京西洞院四條吉岡憲法が始めて染めた黒茶色を、吉岡染又は憲法染と云ふ、紙子にも此色を用ひて居た。

【吉岡染憲法染】 別註、「吉岡紙子云々」の條にある。

【吉岡の】 吉岡憲法染のこと。(五人兄弟の二)

【義國、義道】 良雄、良金の太石父子の變名。(恭整太平記)

【よしこれも云々】 まゝよ、これとても因果應報よとの意。(歌念佛の中)

【葦簀屋】 よしにて編んだ簾を作る職人。

【吉田】 京都東山神樂岡に吉田神社がある、兼好が、

後宇多帝崩御の後に遁世して閑居した地、もと兼好は卜部氏にて吉田の社人であつた。

【吉田】 三河國豊橋の別稱。

【吉田、岡島以下】 吉田（忠左衛門）岡島（八十右衛門）不破（數右衛門）前原（伊助）立川甚平（横川勘平）千崎彌五郎（神崎與五郎）川瀬忠太夫（間瀬久太夫）。（碁盤太平記）

【吉田の雉子の聲】 雉子の啼聲を「けんこう」に擬して云ふ。（兼好法師の上）

【よしな】 由なや、つまらぬこと。

【よしなし】 益なし。

【よしなの問はず語り】 よしなは「よしなし事」の略、たはひもなき、つまらぬ事、人の問はぬ事まで、よしなき獨り言せしと云ふこと。

【吉野漆】 大和國吉野の名産。

【吉野煙草】 大和國吉野郡の煙草は名産。

【吉野の衆かはなが美事】 大きな鼻を吉野の花にもちつた洒落。（丹波與作の中）

【吉野の内裏】 吉野山上藏王堂内、後醍醐、後村上兩

帝の行在所。

【吉野初瀬の花も見る】 吉野初瀬の花は見ぬが歌人は居ながらそれを知る、平家物語（九）にある句。

【吉野初瀬の名木も云々】 親は死しても子が其遺風を繼ぎ、芳名を萬代に薫らせる譬。（女楠の一）

【吉野山】 大和國吉野郡、我邦第一の櫻花の名所。

【よしばむ】 由あり氣に見へる。

【吉原】 駿河國の宿驛。

【葦原雀】 よしきりのこと、喧しく鳴く小鳥。

【吉原雀】 葦原雀、葦切の略稱、行々子のこと、夏季葦生の中で喧しく鳴き立てる鳥、客引き女の口やかましく客を呼ぶのに譬へる。（丹波與作の中）

【義光】 栗田口吉光、通稱藤四郎、著名の刀鍛冶、蜘蛛丸の作がある。

【よしや思へば定めなき云々】 謠曲「芭蕉」の句を流用「……思ひ入さの山はあれど」まで。（伊豆日記の三）

【よし〜と下向】 よち〜と下向すること。

【四筋の町】 新町の廓の、阿波座瓢箪町越後町吉原の四筋町。

【余情】 鏡に向つて戀しい夫を想ひ出す濃艶な風情。（波の鼓の上）

【寄榎】 寄せ木細工の意、但馬屋の檼へにかけて云ふ。（歌念佛の上）

【寄せ詞】 かこつけ、口實。

【余所にのみ見し云々】 新古今「よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山の峯の白雲」からとる。（浦島の二）

【よそに見て歸らん人に云々】 古今集、僧正遍昭が花山の藤花を詠んだ歌「よそに見て歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝は折る共」による。

【余所の揚屋と間夫したら】 余所の揚屋の男と密會したらし。

【余所の勤もかきのもと】 欠きと籬とにかけ、尙ほ柿本人麿の柿にもかける。（冥途飛脚の中）

【夜鷹にする】 夜になると出歩行くことを當て付けて云ふ。（大織冠の三）

【與奪】 職源抄に「依關白與奪」とある、名代のこと。

【四つ】 午後十時。

【四つ足】 人間でない動物だと罵つた語。

【四つ三貫目】 當時享保銀即ち新銀が出来たのは、正徳元年鑄造の四寶銀の悪貨を驅逐する爲であつた、「四つ」とは四寶銀を指し、四寶銀三貫目は丁度新銀の七百五十匁に當る（新銀は四寶銀の四倍の價があつた）故云ふ。

【四つ白】 四足の白い馬。

【四つ寶】 四寶銀のこと、別に註あり。

【四つ手くづし五つばね六もちり】 相撲の手の名稱。（義經追善の三）

【四ツにする】 姦夫姦婦は重ねて置いて四つにするとの諺がある。

【四つの馬】 増一阿含經にある、影、毛、肉、骨に觸れて驚く馬の喩。（釋迦の四）

【四つの夷八つの隅】 四夷八邊の義、諸國隅々の並びす共と云ふ義。

【四つの翁】 支那秦の世の商山の四皓の故事、東園公綺里季、夏黃公、用里先生の四翁世を避け商山に隠れたことを云ふ。

【四つの鳥云々】支那桓山の四鳥の別れの故事、別に註せり。

【四ツの目脚】午前十時の日ざし。

【四つ百五十匁】四寶銀で百五十匁との意。

【四つ目殺し、しちやう、せき、はな、刎】以上は皆團碁の用語。

【四ツ門】四ツ時(午後十時)に打つ廓の限りの太鼓を云ひ、大門を鎖すことを、四ツ門打つと稱へる。

【淀堤】淀から八幡に至る街道筋。

【夜と共】終夜。

【淀と大和の二川云々】天満橋の上流にて淀川と大和川と合ふ、尤も大和川は只古名の存する計り、淀川と大和川、魚と水、我れも小春と二人連に因む、大川は淀川の天満橋邊以西、中の島までを云ひ三つ瀬川とは三途の川の別稱。(天網島の下)

【よどみく〜て月重なり】月經の滞り〜て懐胎しての意。

【夜鍋】昔は夜業をするに、鍋をかけ其中で松を焚き付け、明りを取つたから、夜業を夜なべと稱した。

【世直し桑原〜】地震と雷のまじなひ詞。

【世直し〜】地震の時に唱へる詞、もとの通り世界が直るやうに祈る呪文。

【世並の悪い疱瘡に云々】ぐんなりする良、疱瘡に新湯は禁物なれど二番湯なら、マツタリと身體にあたる、それで怖々ながら二番湯に浴つた心地に譬ふ。

【よなもさこがれ】夜なも焦れるの義、さは「さやうに」の約語。(つれ〜の五)

【世に逢ひ難き】現世間に容れられぬ意。(天智の二)

【世になし者】世に二つとない者の義なれど、此處は世に見棄てられた者のこと。

【四人酉の年】「高麗茶碗」に由ると、姦夫は二十四歳姦婦は三十六歳、本夫は四十八歳の、何れも戌の廻り年で不思議の因縁とされて居る、近松はこれに由つて、此作の上演年が酉(享保三年)であるから、四人共酉年に作つた。(鎗權三の上)

【よねさまに牛蒡】牛蒡は男の精分を強くすると云ふ事にかけて云ふ。

【よねづか云々】妓柄、妓の柄を握るとは當道を好み

て道をたしなむ心と、色道大鑑にある、即ち女郎遊びの骨髓を握る者との意。

【よねと讀み替へ云々】よねは夜寐ゆゑ、闇の内に引籠り、夜店は常闇となつたと云ふこと。(忠信の四)

【米の八十八】八十八を合はすと米の字となる。(雪女の中)

【よねん】妓のこと、四年にかける。(雪女の上)

【餘の悪性】女郎狂ひや飲酒など、盗人の外の悪性と云ふ意。

【世の中に絶えて櫻の云々】古今集の業平の歌、渚の院の櫻をよむ。

【世の中は兎にも角にも假の宿云々】蟬丸の歌「世の中はとても角でも過してん、宮も藁屋も果しなれば」から採る、この假の世に、榮華に暮すも傘一本の下に暮すも、悟つて見れば同じ事と云ふ義。

【世のにぎはひ】富裕なことを云ふ。

【弱きは己が力にて云々】「中々に強きを己が力にて柳の枝に雪折れはなし」の歌による、公平の大病を寓しての序詞。(五人男の二)

【夜はしら〜と云々】七ツ道具、唄け六つ、五代の北條、四つ世の中、三鱗と、教字を巧みに疊みかける。(最明寺殿の上)

【夜は何時ぞ五つ六つ四つ云々】「松の落葉」第五の三勝心中の文「夫婦一所に千日寺の鐘のひゞきに夜は何時ぞ、八ツでもあるか、いつもおつうが目をあく時分」から採る。(重井筒の下)

【夜半にや君が云々】伊勢物語、業平河内通ひの條の「風ふかば沖津白浪たつた山、よはに、君がひとり越ゆらむ」から出る。

【夜半の鶴鳥夜の鶴】鶴は妻戀ふて悲し氣に鳴く、鶴は子を思ふて夜を鳴く。

【夜日】夜を日に次ひで。

【宵寝まどひ】宵の口から眠たがる、宵まどひのこと。

【宵々に脱ぎて我が寝る云々】古今「宵々に脱ぎて我がぬる狩衣、かけて思はぬときのまもなし」を採る。

【呼子の浦】肥前國唐津の西北四里。

【圖骨】ひかゞみ骨のこと。

【餘程の事】よい加減なこと。

【四枚肩】 駕籠に四人舁夫の附くこと、四人肩の義。  
 【讀賣】 市井の出来事、奇談珍聞など摺物に文作して、讀みながら賣り歩く、無論この時代にはなかつたもの。(加増の二)  
 【夜店】 廓の夜見世のこと。(世繼の五)  
 【夜見世を新にお許し】 最初新町は晝ばかり營業のところ、延賣から夜の營業を許可され(十一、十二月を除きて)其後享保年中に、十一、十二月の夜見世をも許された、此處のは、享保の新免許の時を指す。(壽門松の下)  
 【黄泉歸り】 一旦死んだ者が再び蘇生すること、起死回生の意。  
 【よみとかう】 よみはカルタの札を讀むことで賭博、かうも博奕の語。(大織冠の四)  
 【讀み人知らず】 誰れが金を取つたか知れぬこと云ふ事を、公家様ゆゑ、和歌の讀人知らずと洒落た。(淀鯉の上)  
 【讀人知れず】 和歌の作り主の不明なのを云ふが、此處は人知れず暗殺の意。(天神記の二)

【嫁來さるぼう】 嫁を去るに付ける、さるぼう(猿類)は赤貝に似たもの。(傾城酒呑の四)  
 【よめなる女房】 貌のよい女。  
 【嫁入御料】 嫁入荷物の品。  
 【嫁入船】 こゝは藤照姫のことを指す。(大織冠の五)  
 【蓬が島津島】 蓬萊島にかけて、島の鳥との意、但し島津島は鶴の異名。(西王母の四)  
 【蓬が洞】 霞の洞とも云ひ、法皇の御座の場所を云ふ。  
 【蓬生の】 荒れて蓬などの生ひ茂れるを云ふ、謠曲「葵の上」に「妾は蓬生の、もとあらざりし身となりて葉末の露と消えもせばそれさへ殊に恨めしや」。  
 【黄泉芥】 冥土へ塵と攘ひ捨てること。  
 【世々の日繼の天津君】 日の神の天命を受け嗣ぎ給ふ、代々世々の天皇と云ふこと。  
 【よふふる】 世々經ると、夜々降るをもちる。(五人男の四)  
 【寄合の印判の】 寄合やら印判持て来いやらで。(冥途飛脚の下)  
 【寄人】 執筆役のこと、記録所及び文殿等の主典。

【送字】 字を捻ぢてよつたもの。  
 【寄親】 奉公人の身元請負。  
 【寄親】 頼みにする人、講の親方を云ふ。  
 【より風の恨み云々】 こゝには女郎花の縁語に用ひた即ち女郎花姫と小野頼風との故事。(天鼓の四)  
 【奥力の下人】 奥黨の下人。  
 【寄竹】 浪に寄せられて来る竹、此處のは、寄りかゝるの意。(小栗の一)  
 【頼親】 満仲の第二子、頼光の弟、頼信の兄。(五人男の一)  
 【寄人形】 祈り呪ひの當の相手の人形を作る、其人形を云ふ。  
 【より引く】 波の寄せては引くと云ふことを、舞の手にかけて云ふ。(天鼓の五)  
 【捻元結】 紙よりの元結。  
 【四兩あし】 四兩以上。  
 【頼義】 源頼信の子、英邁沈毅、伊豫入道と稱せられる、陸奥守兼鎮守府將軍に任ぜられ、後正四位下伊豫守に拜せられる。

【夜を晝牛を馬】 晝を有、非を理に主張する譬。  
 【夜の御殿、晝の御座】 何れも清涼殿の中にある。  
 【夜の御座】 閑のうち。  
 【夜の認め】 夕食のこと。  
 【夜の蟬】 聲立てず忍び音に鳴くの意。  
 【夜の殿】 夜の狐の稱、上方語。  
 【夜の衾】 寐具のこと。  
 【寄る邊の水】 神社庭前の瓶に盛つた水を云ふが、こゝのは語りぐさ、話の種と云つた義。(女夫池の三)  
 【よるもすがら】 夜もすがら。  
 【夜々は我も焦れて云々】 「夜々は衛士のたく火の焦れても人を雲居に思ふころ哉」衛士又五郎の戀に寄せて權中納言爲藤の古歌を取る。(弘徽殿の二)  
 【悦びありや此所云々】 三番叟の祝言の文句。(吉岡染の上)  
 【悦びして】 こゝは子を産んでの意。(大織冠の三)  
 【悦び使】 祝ひを述べに来往する使。  
 【悦び使】 新抱への女郎を悦びの祝儀使。(吉岡染の中)

【悦びの和歌云々】 悦賀の和歌を揚げること。(日本武

の二)

【悦んで下されは】 悦んで下され、ありやうは、斯く  
くとの意。(嵯峨の二)

【よろずにいみじくとも云々】 「徒然草」の有名な句、

色好まぬ男の兼好を、彼の作の文章を持出して、文

と實際との違ひをなじる。(兼好法師の中)

【萬の病は心から】 「病は氣から」の諺と同義。

【鎧をかけぬ法もあれ】 武將などの誓ひの詞。

【鎧草】 川芎に似た草。

【鎧突】 絶へず鎧を揺り上げて隙のないやうに用心す

ること。

【鎧通】 敵を組み敷ひた時刺す爲に、太刀脇差の外に

別に佩びる短刀。

【鎧初め】 鎧の着始め、武家の男子の少年時に初めて

鎧を着用する儀式。

【鐵虫】 背に甲のある虫の總稱。

【弱腰】 腰の兩側の肉の細つたところ。

【よんどころ候はず】 無慮、余儀なし、止むを得ず。

ら

【羅衣】 羅でこしらへた衣服。

【來迎】 臨終に、佛菩薩來現、淨土に迎へ取ること。

【來迎の三尊】 來迎とは、臨終の際に佛の來現し、淨

土へ導き迎へること、三尊とは彌陀を中心に、觀音

勢至の二菩薩の三尊。

【來儀の鳳凰】 書經の句、鳥が來り舞ふて儀容あるこ

とを云ふ。

【頼光 巖に腰を掛け】 以下の文章は、當時非常に流

行したと見へ、之れに擬した作り替への文句が頗る

多い。(枕言葉の四)

【雷煥】 晋の人、呂處雷煥、刀劍鑑定の名家。

【らいじやうどの弓】 雷上動の弓、支那楚の國の弓の

名人養由が持つてゐたもの、後にその娘樹花女に傳

へ更に源頼光に傳へたと言ふ名弓。

【來世金】 死後來世の冥福を祈る爲に佛に奉る金、夕

霧の身が即ち金なれば、これぞ眞實の來世金ぢやと  
の口合。(夕霧の下)

【頼朝】 義經を「ぎけい」と云ふが如し。

【禮拜】 合掌して佛前に跪き低頭拜禮すること。

【靈拜石】 天王寺南門内太子堂の付近にある、俗に熊

野遙拜石とも云ふ、當寺四石の一。

【羅字】 煙管の竹の管、最初この竹がラオ國から舶來

した故名付けた。

【老陰却て一陽の氣に催さる】 陰極つて却て陽氣生ず

ることを云ふ。(大織冠の四)

【朗詠】 詩歌文章の佳作名句などを節付けて歌ふこ

と。

【朗詠ヶ谷】 岩倉の東北八雲岡の東北山中にある、四

條大納言公任此處で和漢朗詠集を撰した。

【らう九】 遊び客の變名、下文の「名代ながさぬ」と

あり、後に會津蠟燭云々の詞から察して、多分會津

の名産の蠟商人九兵衛とか九良真嶺 かの約語蠟九

であらう。(女殺の上)

【臘月】 十二月の異名、支那では十二月に臘の祭を行



【ふ事から生れた稱。

【狼藉】 亂暴、狼が臥す時、草などを敷き亂す様に喩へての造語と云ふ。

【蠟燭鞘】 蠟燭形をした、上で張つた鞘の鎗。

【らうたげ】 可憐なこと。

【老聘】 老子。

【老中】 徳川時代武家の役名なれど、混用すること例の通り。(忠信の二)

【らうの御所】 籠居の御座所。

【籠の町】 京小川通り二條下るあたり、往時牢屋の在つた處。

【牢櫃】 牢函と云ふ義、女の優し味を以て云ふた語、牢舎のこと。

【老陽】 偶数を陰、奇数を陽とする、一は若陽、九は老陽である。

【らうく】 臚々、朦朧恍惚として夢幻の良。

【浪々】 流浪に同じ。

【樂遊び】 のんきに遊ぶこと。

【落雁】 炒粉と砂糖を混ぜ押し固めた菓子。

【落居】 落着に同じ。

【洛又】 數量の稱、一洛又は十萬に當る。

【落首洛外】 落首は、諷刺的嘲罵的の詩歌などの落書を云ふ、昔時は大に流行した一種の民衆の聲であつた、落首を洛中にもぢり洛外と續けた。(女腹切の上)

【樂天が三頭】 馬相家伯樂が傳へし三頭の御法、三頭はさんづにて、馬背の尻。

【樂坊主】 氣樂な法體生活。

【樂變化天】 欲界六天中の第五、この天の人は、五塵の欲を變化して娛樂する故名付ける。

【洛陽】 京の一部なる左京の別稱、轉じて京都の異名となつたが、もとは支那の洛陽から來る。

【羅計火星】 星の九曜を内譯すると、日月と五星と羅喉星と計都星との九、この中の羅星計星火星を云ふ、何れも災厄の星とて忌まれ、色光も毒々しい忿怒の良があるとされて居る。

【羅喉爲長子】 羅喉は羅喉羅の略、釋尊の長子で、佛十大弟子の一人、密行第一と稱せらるゝ。

【羅生門】 京都九條通南西、東寺の西、千本通に其礎

跡がある、往昔、朱雀門と相對して其南にあつた内裏の外廓南門と云ふよりも渡邊綱と酒吞童子の戯曲で名高い。

【羅生門】 茨木屋の仇名を茨木童子から取つて「童子」と云ふた(吉田屋を兼好と呼んだに對す)、其家の遺手ゆゑ、綱(渡邊綱)としやれ、更に大門を羅生門としやれて云ふた。

【羅生門茨木童子が腕骨】 京都東寺羅生門で源頼光の四天王渡邊綱が、鬼賊茨木童子の片腕を斬り取つた物語のこと。

【羅生門の變化】 茨木童子が綱に腕を斬られ、伯母に化け行き其腕を奪ひ返へしたことを云ふ。

【羅刹國】 食人鬼の棲む國、羅刹鬼は黒身で目は碧、髪は赤色。

【埒の明かぬ】 埒は馬場の周圍の柵、埒が明かぬは、中へ入れられぬ、何もならぬとの義。

【埒のあかぬ事】 都合の悪いこと、勝手の悪い事。

【埒のひぬ事】 埒のあかぬ事と同義。

【藤が】 姉姫自分を指して云ふ詞。(西王母の一)

【蘭于】 鮮やかに輝く良。

【蘭菊の】 白氏文集「狐藏三蘭菊叢」の句から狐の形容句となる。

【亂火の仕掛】 蜂筒式爆烈彈の火花を散らす花火仕掛けのからくり、舞臺の上にて實演したものであらう。(國性爺の五)

【らんけん】 和蘭絹のこと。

【蘭麝】 麝から採る麝香の一種、蘭の芳香に似通ふ故の名。

【蘭省の花の時云々】 白居易の詩「蘭省花時錦帳下、盧山雨夜草庵中」蘭省は太政官の唐名で後に辨官の異稱となつた。

【卵生の御子】 袋のまゝ卵のまゝで産れた子。

【卵塔】 五輪の塔。

【らんでん鎖】 細かな鎖の上に紋鎖を入れたもの。

【蘭の棋】 あらゝぎの棋、棋の美稱であつて、月の桂の縁語である、「桂棹蘭葉(棋のこと)」など云ふ。(東山殿の三)

【覽箱】 宣旨を入れる爲の文箱。

【嵐婆風】大疾風、萬物を破壊して進む迅猛風。  
 【亂拍子】舞の一種にて、白拍子の舞ひし曲に模したる能樂秘曲の一つである。  
 【變輿屬車】變輿は天子の乘輿、屬車はこれに續く車。

り

【柳營】細柳營の略、將軍の所在地の稱、支那漢の將軍亞夫が細柳と云ふ地に陣營した故事から出る。  
 【龍返し】吉野西院谷に龍返しの岩がある、義經の潜伏した地と稱する。  
 【龍眼肉】熱帯地方に産する薬用の果。  
 【龍吟すれば雲起り云々】一英傑出て衆星之れ従ふの喩、こゝのは颯爽たる勇士の形容。(小栗の二)  
 【柳花苑】舞樂曲名、延暦寺の遣唐舞生、久禮眞茂が傳へたもの。  
 【龍華越】山城國大原から近江國伊香立村龍華へ通ずる山路。  
 【柳公權】唐の華原の人、經術に長じた學者。  
 【流行走行】流るゝ如く走る如くに馬を操ること。  
 【龍骨車】水車に似て、水をすくひ上げて田畠にそゝぐ具。

【龍虎梅竹】手習兒の選書の文字、習字の護神天滿宮に奉獻した習例を云ふ。(卯月の上)  
 【龍善寺】有名な大原問答のあつた寺は龍善寺でなく、大原の勝林寺であつた。(大原問答の三)  
 【流泉啄木の曲】琵琶の秘曲の名にて、蟬丸が博雅三位に傳へたと稱するもの。  
 【龍著】龍も著類のうち。  
 【龍女成佛水施銀鬼】法華經にある娑竭羅龍女を請じての水施銀鬼。  
 【龍女も成佛】「八才の龍女」に註す。(重井筒の下)  
 【龍蹄をさしむける】龍蹄(天子御料の馬)を差し向けられること、即ち親征の意。  
 【流涕こがる】泣き暮ふこと。  
 【龍燈天燈】龍燈は海上に燃ゆる燈、龍が點ずる火、天燈は天堂に滿つる燈火、無量の佛燈の形容。  
 【龍の吟】龍吟すれば雲起るの諺がある。  
 【龍の胸にも蹴躓き】名馬も時には蹉跌あり、弘法も筆の過り、猿も木から落ちると同義の譬。  
 【龍の鬣を蟻がねらう】力の及ばぬことの喩。

【劉伯倫】 晋の劉伶のこと、大好酒家にして酒徳頌を著した人。

【龍猛大師】 龍樹のこと、南印度又は西印度の産、八宗の祖師と崇められ、後世諸宗の教旨多く彼に萌芽を發すと云はれる。

【龍門】 禹が河水を鑿通した地名、黄河の上流にある、江海の魚が茲に集り、登る者は龍と化し、登り得ぬ者は額を點し脚を暴らすと、三秦記にある。

【龍門原上の土に骨を埋む云々】 白樂天の詩「龍門原上土、埋骨不埋名」から出る、龍門の事は別に解けり。(五人兄弟の五)

【龍門に跳る魚も云々】 聖賢も時に災厄に遭ふことの比喩。

【龍王の末孫云々】 こゝのは三上山の蜈蚣を退治し龍宮へ掣入りしたと云ふ倭藤太秀郷を云ふ。(五人兄弟の二)

【利運過ぎる】 勝手すぎる、我儘すぎると云ふ義、商家の通語から起る。

【理を非に托げる】 いやが應でも、無理にも。

【理を以て非に落る】 正しい道理も道理にならぬ。

【力者】 かる丁とも云ふ、力わざ専門で大寺に仕へ、上人外出の時など隨行したもの、頭も丸く剃つて居た。

【力者】 強力の男。

【力彌】 大石主悦の變名、この曲に此名初めて現はれる。(恭盤太平記)

【六氣】 天地間の六つの氣、陰、陽、風、雨、晦、明を稱す。

【六義】 風、賦、比、興、雅、頌の六つ、詩の六義と同意。

【六宮の粉黛云々】 長恨歌の「一回頭一笑百媚生、六宮粉黛無二顔色」、前句と共に恒子姫の全寵を専らにしたことの譬。(枕言葉の一)

【六儀を立て】 物の道理を辨へること、六儀とは周禮に、祭祀の容、賓客の容、朝廷の容、喪紀の容、軍旅の容、車馬の容とある。

【六牙の白象】 普賢菩薩の乗用、「觀普賢經」にある。

【陸修靜】 吳興の人、廬山に住む道士、慧遠法師と陶

淵明と、所謂虎溪の三笑の人々。

【陸績が橘】 「は」の部「花橘唐土人の孝行」の條に註した。

【陸地に舟漕ぐ】 宙にもがく形容。

【利喰の月をどる】 利息が月々重なる故、元金も遂に利子に喰ひ込まれることを云ふ。

【陸平永寶】 醍醐天皇、延喜十五年に陸平永寶を鑄させ玉ふ。(反魂香の下)

【理外】 理外の理の約。

【李廣】 漢の李廣は射術の名手で、草中の石を虎と見て射止たとの故事がある。

【りくらう】 美男六郎のこと、唐書揚再思傳「張思宋以三姿貌一倅、再思曰。人言六郎似蓮花一正蓮花似六郎一耳」とある。

【利劍即是】 「利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除」の義。

【利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除】 彌陀の功德の廣大甚深、よく無明煩惱を斷つこと恰も利劍の如しとの意、般舟讚に出づ。

【利根】 鈍根の對の佛語で、才智の非常に鋭ひこと、

此處のは賢才ぶつて言はぬものとの意。(曾根崎心中)

【驪山の春の匂ひ水】 驪山は秦の始皇帝が神女と遊んだ地、天下一の温泉宮と稱せらる、「匂ひ水」は温泉の湯の美稱。

【李將軍】 射法の名人、漢の李高のこと、妻懷胎して生きた虎の肝を望む、李高即ち虎狩に出で虎と闘ふたが、遂に食ひ殺されたと傳へらる。

【利生安民】 國利民福の意。

【李韜天】 「國性爺」の悪まれ大將、敵役の名。(天網島の上)

【李韜天】 假作の人、「天網島」に太兵衛の仇名に用ひられて一層評判の高い敵役となつた。(國性爺の一)

【六甲六丁云々】 陰陽道の神の秘文。(枕言葉の二)

【六國を合す】 春秋戰國時代に割拠した六雄國、齊、楚、燕、韓、魏、趙、これに秦を加へて七國と稱した、秦始皇帝が六國を討滅併合した故事。

【律師】 僧官の名、僧都の次位。

【律に調べ】 呂と律との兩調のうち、呂の陰に對し、

律は陽の調子。(川中島の三)  
 【律の歌】 音楽の調子の陽に属する音調の歌、呂の對稱。  
 【立坊】 立太子のこと。  
 【立派好き】 贅澤好みのこと。  
 【律令】 律令格式の略、古の諸律諸令の制度を示した書。  
 【離の卦】 八卦の第三、中斷。  
 【理の次】 天地の間、先づ理あり、然る後氣ありて物生ずと云ふ宋儒の説による。(蠅丸の五)  
 【理髮】 髮あげ。  
 【理髮給仕】 元服の髮あげの役、主として左大臣があたる。  
 【理非】 是非に同じ。  
 【理非なき】 道理の有無を云はさない亂暴。  
 【立鼓】 鼓の胴のやうに長形にて胴中のくびれた形の稱。  
 【粒子鞘】 立鼓、即ち鼓を立てた形の鎗鞘。  
 【李夫人の仇し影】 漢の武帝が李夫人を慕ふて焚いた

反魂香の故事。(一心五戒の一)  
 【諒闇三年】 諒闇とは天子が喪服の期間を云ふので、高宗は父の喪に居て信黙して三年言はなかつたとの故事がある。  
 【兩馬強き欲の皮】 將菜の語、兩方の桂馬にかけて、どうでも取ると云ふ慾深いこと。(壽門松の中)  
 【梁園】 梁の孝王は宮室苑囿の樂を悦んで常に宮人賓客と遊びを共にした故事。  
 【兩替町】 當時兩替町は二ヶ所あり、一は内兩替町とて高麗橋東詰から東松屋町筋まで、他は現在の東區兩替町舊名伏見兩替町なれど、手島屋の地から考へると多分内兩替町の事であらう。(女殺の下)  
 【兩眼魚の如く】 沈んでどんよりした死眼の形容。  
 【兩眼拉ぎの祈】 兩眼を碎き拉がん計り、眼前咫尺に數珠をもんで祈る。  
 【兩郷】 清貫、希世の二郷。(天神記の五)  
 【良禽は木を見て住み云々】 賢い鳥は良木を撰み棲む如く、良臣は賢主を擇ぶが大切との喩、三國志の蜀志に「良禽相木而棲、賢臣擇主而事」と。

【兩口】 馬の口を双方から取ること。  
 【りやうげ違ひ】 了簡違ひの訛。  
 【兩國懸けし】 伊豆相模かけて。(會稽山の三)  
 【兩御所の首尾】 父母の手前を云ふ。(關八州繫馬の二)  
 【兩箇の所願】 重盛調伏と源氏の盛運との二願。(女護島の三)  
 【靈山が崎】 鎌倉切通しより南の山の海中へ突出した地。  
 【領掌】 うべなふ。  
 【良將の軍を統るや云々】 黄石公上略にある文、「良將之統軍也、恕己治人推惠施恩、士力日新」。  
 【靈鷲山】 中印度摩揭陀國王城の東北に聳へる山で、釋尊說法の地として名高く、此山には靈仙群居し多くの鷲鳥遊集する故、名付けたと云ふ。  
 【兩舌】 嘘、俗に云ふ二枚舌。  
 【靈山】 群仙の住むと云ひ、又多くの鷲が遊集すると云ふ、所謂靈鷲山のこと。(天智の三)  
 【靈山寺】 阿波國板野郡板東村にある四國通路一番の

札所。  
 【靈山淨土】 靈鷲山の淨土に居ながら濟度したこと。  
 【梁塵飛上】 聲梁塵を動かすの語から出る、女達の関の聲が梁の塵を飛ばすと云ふ義。  
 【兩頭の大蛇が丈山云々】 丈山は常山、この山に棲む兩頭の蛇が進退巧みに人を惱ますを、善く兵を用ふる事に譬へ、孫子に「常山の蛇勢」とある。  
 【兩の手に金輪】 「金輪」は能の曲名、捕はれて手錠おろされとの意。(傾城酒呑の四)  
 【兩雄を闘はしめて其虚を討つ】 鳴蛤の争ひ、印ち鶴蚌の争は漁夫の利となると云ふ軍法の利用(戰國策)。  
 【兩六波羅】 京都、六波羅密寺の邊にあつて、探題が二人、南北に分れて執政した役所。  
 【歴劫不思議】 幾萬劫を経ても思議し得ざる誓願、法華經普門品第二十五の中の句「弘誓如海、歴劫不思議、侍多千億佛、發大清淨願」とある。  
 【龍頭鷓首】 龍は水中の靈、鷓は風を得て疾飛する水鳥、故に舟の舳先に龍頭又は鷓首を付ける、即ち美

麗宏大な船の稱。

【龍驤の波】 驤は舉り起ること、龍の擧るやうな高波。  
【龍に虎の與する】 鬼に金棒、錦上に花を添へると同義。

【龍馬】 周禮に「馬八尺以上爲龍」駿馬の美稱。

【陵王】 舞樂曲名「蘭陵王」北齊の陵王は美男子で戰陣に出て武容に欠けると云ふので、常に勇猛な假面を付けて敵に對したと云ふ故事により、陵王の面は即ち此鬼のやうな面を用ひて居る。

【閭巷の賤】 山里の民。

【綠林】 盜賊の異稱、もとは荊州の山名、漢末の亡命者が集り匿れた地ゆゑ名付けると。

【慮外な小袋】 辜丸のこと。

【慮外申さん】 慮外ながら献上申さん。(小栗の二)

【呂水の磯枕】 支那の天鼓の故事、天鼓が身を沈めた地。(天鼓の五)

【呂太后】 漢の惠帝の母、惠帝に代り天下の政を執り、已れの一族を集め天下を奪はうとした一種の女傑。  
【呂洞賓が袖中の青蛇云々】 呂洞賓は道教の仙人に

て、青蛇を變じて黃龍と化し蓬萊山に遊ぶ、其蓬萊山が唯心の淨土、即ち佛教の極樂淨土であるところ。

【呂の歌】 律に對し、音樂の調子の陰に屬する音調の歌。

【呂望管夷吾】 呂望は太公望、周の文王の軍師、管夷吾は管仲、齊の桓公を助けて政を執つた將師。

【離々】 木肌裂けて亂れだつた貝。

【離々たる馬目連々たる雁行】 碁盤面の白黒の石が散在し又相連續せる形容。

【りん】 下女の名。(波の鼓の上)

【輪廻】 死生、榮枯、盛衰などの、絶へず旋回して又元にかへる様が、丁度車輪のめぐるに似た故に云ふ。

【輪回したる女】 輪回にて迷ひに迷ふて定めかねたる態の女。

【輪廻深き云々】 こゝには執着がましけれどとの意、冥土の母の妄執を想ふての語。(枕言葉の三)

【林間に酒を爛め紅葉を焚く】 白氏文集に在る白樂天の仙遊寺に寄題の律詩中の句「林間暖酒燒紅葉」

石上題レ詩掃ニ線苔一から出る。

【格氣講】 女房共が寄り合ひ頼母子講などする席上にて、己が夫の悪性など諍り合ふたのを、格氣講と稱したもので、後には遊里などにも行はれた、當時の流行風習の一つ。

【隣郷の褒似】 隣國周の幽王の妃の名。

【繪巾】 りんずにて製した頭巾。

【輪藏】 轉輪藏の略、經文を藏する廻轉式の書棚。

【臨終の一念に攝取の光明を期し云々】 「觀無量壽經」にある句、死に臨んで念佛を唱へ、彌陀の光明に攝取されんことを期待し、十念(十聲念佛)を唱へて諸佛の來迎を待つとの意。

【臨時客】 攝政關白の家に、大臣以下の公卿を招待して酒宴を催すこと、定式の公事ではない故、臨時客と稱する。

【吝惜】 おしむこと。

【りんす】 昔遊女が語尾に使ふた詞、それを大阪町家女の詞に見せかけて使ふた可笑味。(女腹切の上)

【臨川堰】 嵯峨村大井川渡月橋の東、臨川寺の前にあ

つた石堰を云ふ、「臨川石堰」の略、名高い水車や石堰のあつた事は古記に見へる。

【林、玉、五兵衛】 下婢下僕の名。(冥途飛脚の中)

【りんによがつて】 いとしがつて、可愛がつて、海女訛。(女護鳥の二)

【林之介】 禿の名。(淀鯉の下)

【輪鋒船】 佛具の輪鋒に似た商車を具へた戦さ船。

【臨命終】 臨終のこと、王位臨命終時不隨者(大集經)りんやはつ おりん、おはつ、下女の名。(大經師の上)

【燐々】 燐火の青く燃ゆる光り。

る

【縹綫】 細目にかけること。  
 【類船】 難破船のこと。  
 【累祖】 代々の先祖。  
 【累々】 累々、重なり合ふ良。  
 【留守をもさせん】 妻にすること。(歌念佛の上)  
 【呂宋】 比律賓群島中の第一の大きな島。  
 【流轉三界中恩愛不能斷云々】 父母妻子の恩愛に迷ふて居ては生死に沈淪する、今これを絶つて無爲眞如の道に入る時は、却て父母妻子を救ひ、眞の報恩が出来る云々。  
 【流轉三界中乃至眞實報恩者】 迷ひを覺し佛恩に報はんとする者との戒文。  
 【瑠璃玻璃綾どる衣】 瑠璃や玻璃を綴つたキラ／＼と光る衣裳のこと。

れ

【令】 鎌倉幕府政所の次官の稱。  
 【厲氣切風】 病苦の劇しい形容。  
 【囹圄】 牢獄のこと、囹は領、圄は嬰、即ち囚徒を領録して禁錮するの意。  
 【靈化】 物の化。  
 【麗景殿】 内裏綾綺殿の左、宣耀殿の右にある宮殿の稱。  
 【靈想の驗】 靈感のこと。  
 【靈社】 先祖の靈を祀る社。  
 【靈神】 あらたかな神、靈驗いやちこな神々の義。  
 【例の童の言の葉】 京の童を、口善悪のない例の童と云ふたので、京童の言葉は、すぐ世間の噂となつて廣がるの意。(女腹切の上)  
 【例幣】 毎年の行例として、朝廷から神社等へ幣帛を奉ること。

れ

【黎民】 人民。  
 【伶倫】 伶人のこと、支那古代の伶人の名から起る。  
 【伶倫】 伶人、樂人と同義、秦川勝は舞樂の祖として傳へられてゐる。(聖徳太子の二)  
 【玲々】 金玉類の鳴る音の形容。  
 【零々】 滴り落つるさま。  
 【靈々】 靈妙不思議の良。  
 【麗々と】 明かに。  
 【了達】 覺り達すること。  
 【了知】 覺り知ること。  
 【料足】 料金、料は物の代、足は錢。  
 【料理き】 料理利き、料理通。  
 【料理袴】 料理人が料理する際着ける袴。  
 【歴々色ある女房達】 やんごとなき眉目よき女たち。  
 【れそ】 「それ」の廓詞、例語、「それ例の女が」と云ふところを「れそが」など云ふが如し。  
 【連衡の謀】 周末に於ける秦と他六國間に行はれた外交政策、張儀蘇秦が六國に説いて連合して秦に服せしめた、即ち秦の始皇が六國を呑んだ所謂「連衡」

の謀」なるもの。

【連歌師】 連歌に長けた人、連歌とは和歌を二人して  
應答する、所謂聯歌、詩の聯句と同じ。

【蓮華漏】 水時計の一種、支那廬山遠公の門下晋の僧  
慧要の發明に係る、山中刻漏なき爲め、十二葉の芙  
蕖を立て、十二時を計つたと云ふ。

【連枝】 同胞、兄弟を云ふ、兄弟は木の枝を連ねて其  
元を同じふするの意から出る。

【蓮生坊】 熊谷直實の法名。

【蓮社號】 淨土宗で貴人の法名の下に添える語。

【連雀】 雀より稍大、全身灰紅色、翅末深紅、首に冠  
毛がある。

【連署】 鎌倉時代武家の役名、執權の補助役。

【蓮台寺】 山城船岡山下の眞言寺。

【簾中】 すだれの中の意にて往昔は公卿の内室の敬稱  
であつたを、後には大臣、諸侯などの奥方の敬稱に  
轉用された。

【連着】 糸で平らに幅廣ふ組んだ紐。

【蓮如様の名號】 本願寺蓮如上人自筆の名號。

ろ

【漏刻】 水時計、水を使用して時刻をはかる器。

【路銀】 旅費のこと。

【ろく】 陸なり、正しう、平らに。

【六角堂】 京都三條烏丸にある。

【六月ばらへまたをかし】 六月の御萩、これは一徒然  
草一にある語。

【六間口の家踏しめ】 六間間口の家體を踏み稱へた主  
人と云ふこと。(天網島の上)

【六軒町の小夜格子】 六軒町は塗師屋町即ち今の玉屋  
町、元文寛保の頃まであつた六軒の女郎屋から此名  
がある、即ち、堺屋、桔梗風呂、重井筒屋藤十郎、  
美濃屋、春木屋伊右衛門、河内屋勘兵衛等、小夜格  
子とは、二階窓の竹格子を云ふたもの。(重井筒の中)  
【六根自在】 眼、耳、鼻、舌、身、意の六根が自由に  
働くこと。

【蓮府】 大臣の異稱、支那晋の大臣王儉が、家に蓮を  
愛玩した故事による。

【戀慕かや】 尺八の曲戀慕流しかや。(吉岡染の中)

【戀慕流し】 尺八の譜に云ふ、虛無僧の手に二つあり、  
臨門流と虚鈴流、此臨門流を戀慕流しと言ひ通はせ  
たものと云ふ云々。

【戀慕の間に暗がりに云々】 八百屋お七の祭文で名高  
ひ文句、東の果に名を流すとはお七のことで、これを  
引用したのは、お七が火刑に處せられたは天和三年  
三月二十九日、この心中は二十一年目の寶永元年  
三月二十九日と同月同日の因縁に由つて居る。(重井  
筒の下)

【戀慕の間の暗がりに】 松の落葉「八百屋の娘お七と  
て戀慕の間の暗がりに」をとる。(蟬丸の三)

【れんぼれるゑ】 吹笛の音。

【六根淨】 我等が外界の刺戟を受くる根なる眼耳鼻舌  
身意の六つを六根と云ひ、この六根の妄執を斷つ事  
を六根淨といふ。

【六根清淨】 六根は別に註あり、六根を清く保ち、心  
を潔淨に持つ祈りの詞。

【六根六識】 物事を知覺する感覺意識、六根とは、眼  
根耳鼻根舌根身根意根の稱、六識とは、眼識耳識  
鼻識舌識身識意識の稱、佛語。

【祿山】 安祿山、唐の玄宗帝に仕へ、異志を抱き唐室に  
叛き、洛陽に都して自ら帝と稱した逆將。

【六宗】 六宗とは何々を指すか、當時は左の八宗があ  
つた、三論、法相、俱舍、成實、律宗、華嚴、天台、  
眞言等。

【六字河臨】 六字河臨法、千手觀音を本尊とし、六字  
即六觀音の眞言によつての祈禱法、此法を修するに  
は河に臨み船を道場として七瀬の祓をする。

【六十四卦】 曆占の語、伏羲六十四卦を云ふ、太極か  
ら兩儀、四象、八卦、十六、三十二、六十四卦と重  
ぬる。

【六十四部の諸論】 印度に行はれる外典の諸論六十四部あるを云ふ。  
 【六十四本の御籤】 伏義氏が易の八卦を作り、周の文王が之れを擴張して六十四卦とした。  
 【六十六部】 廻國巡禮の行脚僧、法華經一部づつを諸國の靈場へ納めて廻る、凡て六十六部を納本する故此稱がある、後には僧俗男女に拘はらず、只諸所の神社佛閣を巡拜する者を云ふやうになつた。  
 【六尺】 駕籠かき、陸尺、力者(りよくしや)の訛かも云ふ。  
 【六尺】 普通は駕舁などを云ふが、轉じて屈強な大男を六尺と稱へた、此處のは淀屋の召遣ひの下人共のことを云ふ。(淀屋の上)  
 【陸尺】 六尺のこと、別に註せり。  
 【陸尺づつみ】 陸尺のするやうに頭を巻くこと。  
 【六社の宮】 六所の宮、相模國中郡國府村新宿にある。  
 【六種震動】 華嚴經疏に見へる、大地が六種に震動することを云ふ、動、起、涌(以上は形の變)震、吼、擊(以上は聲の變)の六震動。

【六種の夢】 周禮に見ゆる六種の夢とは、(一)正夢(二)噩夢(三)思夢(四)寤夢(五)喜夢(六)懼夢を云ふ。  
 【六親】 普通には、父母兄弟妻子の稱。  
 【六神通】 佛教に説く六つの通力、神足通、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、漏盡通の總稱。  
 【六神通の阿羅漢】 六種の神通力を得たる阿羅漢、即ち天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通のこと。  
 【六孫王】 清和源氏性の祖、源經基のこと、經基は貞純親王の子で、貞純親王は清和天皇第六の皇子、故に經基を六孫王と呼んだ。  
 【六孫王の誕生水】 今の千本通八條、東寺の東北、六孫王源經基の廟社六孫王神社の所在。  
 【六道】 現世の業により、死後は必ず六道の何れへか行かねばならず、其道の分る、所を六道の辻と云ふ、即ち六道の辻談議とかける。(蟬丸の五)  
 【六道四生】 六斗四升の音を響かす、樽に詰つたが六道の辻に迷ふた喩、四生は、胎生卵生濕生化生の稱、

一切衆生は六道四生の間に輪廻する。(論維三の上)  
 【六道四生二十五有】 六道は別に註す、四生とは胎生、卵生、濕生、化生を云ひ、二十五有とは、衆生の論轉する生死界を二十五種に分つたもの。  
 【六道の繪圖】 地獄極樂の畫解きの圖。(盛久の四)  
 【六道の巷】 冥界六道の辻。  
 【六畜】 馬、牛、羊、犬、豕、鶏の稱。  
 【六地藏】 延命、寶處、寶手、持地、寶印、堅固意の各地藏の稱。  
 【六通】 六神通、即ち天眼通、天耳通、他心通、宿命通、身如意通、漏盡通の稱。  
 【六條河原】 京都六條の川原、昔の所稱場。  
 【六度萬行云々】 六度は六波羅密、萬行は一切の善行の意にて波羅密山を云ふ。  
 【ろくに居る】 あぐらかくこと。  
 【ろくにおよれ】 心安く御寝なされ。  
 【ろくにしや】 正しく、眞直にとの義。  
 【六波羅入道】 清盛を云ふ、六波羅の館の所在。  
 【六波羅の北の殿】 六波羅は京都鴨川の東、五條と六

條との間、其北にある殿舎。  
 【六波羅密】 六種の波羅密を云ふ、波羅密とは菩薩の修する行を稱し、即ち、檀那(布施)波羅密、尸羅(持戒)波羅密、羼提(忍辱)波羅密、毗梨耶(精進)波羅密、禪那(靜慮)波羅密、般若(智慧)波羅密を指す。  
 【六番頭】 御殿の宿直や警衛の役人。  
 【六本松】 吹上濱にある、「十二段草子」に、牛若御曹子が捨てられたところ。  
 【六萬恒河のうろくず】 恒河は印度の大河ガンヂス川のこと、其河に棲む六萬の鱗魚。  
 【六萬九千三百八十四文字】 法華經の文字の總數。  
 【六脈】 六種の脈搏のこと、即ち浮、沈、虛、實、遲、數など。  
 【六慾】 六根に纏はる欲情を云ふ、六根とは即ち眼(見る)、耳(聽く)、鼻(嗅ぐ)、舌(味ふ)、身(觸る)、意(思ふ)である、但し本文には「意」欲が脱けて居る、恐らく筆者の過誤であらう。(東山殿の四)  
 【六龍】 六馬の美稱、天子の車に駕する六頭の馬。  
 【轆々】 車の行く音色。



【六々に】時刻の六つと碌々にかける、次で五々八々の数字語を産み出してくる。(宵庚申の下)

【六々鱗】鯉のこと、六々三十六鱗は鯉の鱗の數。

【遷齊】諸所に巡邏して齊(食)などを乞ふこと。

【廬山炭】廬山は支那江西省の絶景地、そこから出る炭。

【廬山の雨】白居易の詩句「蘭省花時錦帳花、廬山雨夜草庵中」を採る、白居易は廬山の邊の草庵に閑居した。

【廬山の白蓮社】謝靈運が廬山にて惠遠を見て敬服し、寺に臺を築き池を穿ち白蓮を植へた、この時、惠遠は諸賢と共に淨土の業を修め、白蓮社と號したとある。

【呂州】風呂屋女を云ふ。

【路次の經營】道々の用意手順。

【盧生】邯鄲の夢を見た人、「邯鄲の夢」註參看。

【繡床】船のとももの床。

【ろませ以下】ろませは六(六)の唐音ろにませは助語(さいは拍子の語、とらいはいは十、さんなは三(なは

助語)はまは八(まは助語)さんきうは三九、ごうは五、りうは六、すむゐは四(四矣)。

【露命】はかない命、露に喩へて云ふ。

【論語季氏の編云々】季氏は季子、論語の季子の篇に、孔子の子鯉が趨つて庭を過ぎるを呼び止めて、詩と禮とを學ぶべきことを訓へたと云ふ故事。



【傍柁】船腹の板にかけておす柁。

【王を責めたる駿馬詰】桂馬の王詰め、將棊の駒の語にもちる。(日本武の一)

【王羲之、趙子昂】王羲之は晋の産、書畫に名ある人。趙子昂は宋の人、これも書畫の名家。

【黄香山谷】共に支那二十四孝中の人。

【往還】人馬の往來多い大路、國道と云つた意。

【黄卷朱軸】經卷を云ふ、經卷は黄紙に赤色の軸を用ふ。

【黄卷朱軸云々】佛經卷を云ふ、後漢明帝の時、道經と優劣を試むとて、佛經を火中に投じたが、紙は黄色に軸は燦紅と變じたが、遂に灰滅しなかつたと云ふ故事から出る。

【王佐の文云々】君を輔佐する菅原道實の文才を云ふので、仁壽殿に侍して賦した梅花の詩の故事。(天神

記の一

【王子を出で】皇子の位を離れて出ること。

【黄鐘調の鐘の音】天王寺講堂の背後の鐘樓にある梵鐘は黄鐘調の音であると云ふ、古稱無常院の鐘とは是れ。

【往事渺茫として夢に似たり】白氏文集の詩を採つたもの「往事渺茫都似夢、舊遊零落半歸泉」、泉は黄泉の義。

【往生院】京都小倉山の東麓の尼寺、祇王寺を云ふ。

【王城守護の多聞天】洛北鞍馬山の毘沙門天を指す。

【王城に立つ雲】王者の在る所には常に祥雲たなびくと云つた諺を引く。

【往生の御營み】こゝのは往生の觀念の意。(出世景清の四)

【王城の祇園町】王城は京、祇園町は京の遊所。

【王城の土】京の地のこと、京は皇居のある土地ゆゑ稱する。

【王者は愛を以て政を私せず】人に王たる者は徒に愛憎の爲に法を左右する事は成し得ぬとの義。

【王子】は九十九所【熊野王子の社は京都から熊野まで九十九社ある。】  
 【黄痘神】黄痘病の神、黄痘は皮膚及内部器官の黄色に變ずる病。  
 【皇仁庭】一越調の高麗樂の名。  
 【王は十善神は九せん】王は十善の位、神は一善足らぬ九善の位、神よりも國王が果報優れてゐるとの義。  
 【王法】王者の法、王たる可き天下の正道。  
 【王法公方】皇家を指す。  
 【黄幡】軍陣を守る神、その年の此方角に向ふて弓始を行へば吉なりと言ひ傳へる、曆の語。  
 【往七日】一年中に十二日ある他行出陣の凶日。  
 【往來の見慮】世間の見せしめ。  
 【王良が秘密の鞭】王良は造父と並稱する馬術の達人、韓愈の送石處子一序に見える。  
 【輪をかける】しんにゆうをかけるとも云ひ、刎ね上る馬の勢に、更に輪をかけた勢と云ふこと。  
 【輪を掛ける】輪なりに馬を乗り廻はす。  
 【若恵美壽】正月に祭る恵美壽神。

【和歌を上ぐ】祝賀の歌をうたふ、祝意を表す。  
 【我門に千尋ある藤云々】伊勢物語「我門に千尋ある藤を植ゑつれば夏冬誰れか隠れざるべき」平家一門の豪華を云ふために引用。(女護鳥の二)  
 【我境界の友鳥】畢竟は我れと同境界の鳥の友よ死の友よと云ふ義。  
 【若草に妻も籠れり】伊勢物語の歌の轉用、「武藏野は今日はな焼きそ若草の妻も籠れり我れも籠れり」。  
 【若草山の煙草賣】若草と煙草の縁、山は三笠山の北にある。(大織冠の四)  
 【若衆】芝居の若衆形の輩。  
 【若衆と辣味噌の味】屋敷方で使ふ辣味噌は古くて味がよい、見た目には質素な屋敷方の若衆と共に、ぢみの味を稱へたもの、「若衆と辣味噌の味は鼻につく」と云ふ諺を轉化して其裏を云ふた、近松に此種の古諺轉用法が妙くはない。(宵庚申の上)  
 【若大衆】若衆や山法師。  
 【我が爲の天照る神】救ひの神、大恩の神。  
 【我手料理云々】我れと我が身に傷けることを云ふ。

【和歌所】村上天皇天曆五年十月に梨壺に設置されたもの。  
 【我殿顔】自分の夫と言はぬばかりの振舞を云ふ。  
 【我共】曾我兄弟の形見の子供のこと。(百日曾我の五)  
 【若猫】若輩者、新米めと罵る語。  
 【和歌の一徳】御製「秋の田の」の歌のことを指す。(天智の五)  
 【和歌の浦に沙漏ち來れば云々】萬葉等にある赤人の歌、此歌の解釋が古例によつて濁を無みを片男波と解してゐる。(百日曾我の五)  
 【和歌の文字敏達天子】敏達天皇は欽明天皇第二子、三十一代ゆゑ和歌の文字と云ふ。  
 【我法は廣大にして人を殺さず云々】是れ四郎の所謂邪教の本義であつて、亦當時の耶蘇教が唱道した教旨である。(鳥原蛙合戦の三)  
 【若松茂る岸】こゝは住吉の名松、岸の姫松を云ふ。(天智の三)  
 【わがみ】そなた。

【若緑】少年正行と松原の縁にかけける。(女楠の四)  
 【若宮】鎌倉八幡宮の下の宮若宮大権現。  
 【若みんづり】若水のこと。  
 【若紫の色深く】春日の里の縁語、伊勢物語「春日野の若紫のすり衣、忍ぶの亂れ限り知られず」の歌による。(井筒業平の三)  
 【若紫の稚立ち】光源氏の御息所紫上の幼時に喩へらる。(孕常盤の四)  
 【若紅葉】子供を指す。(出世景清の三)  
 【わかやがす】酒盃を盛んに交換すること。  
 【別れの櫛】齊宮初めて伊勢に下り給ふ際に、父の帝御手づから其額に御櫛をさゝせらる、これ御父子の縁の切れ目にて別れの櫛と云ふとある、但しこゝには、單に櫛と凶事との關係を並べ立て「何ぞのつげの小櫛かや」で結んだまで。(女殺の中)  
 【別れの鳥はものかは】待宵の小侍従の歌「待宵に更け行く鐘の音きけば飽かぬ別れの鳥はものかは」による。  
 【和漢朗詠】和漢朗詠集は和漢の詩歌を採撰したもの

藤原公任の撰。

【脇】 句と云つた縁語、傍の人の義。(重井筒の中)

【脇がかり】 こゝのは當の本人以外の者に崇ること。(女殺の中)

【わき心】 脇心、外へ心を移すこと。

【腋壺】 腋の下の凹處。

【湧きて流るゝ和泉の國】 新古今「みかの原わきて流るゝ泉川、いづみきとてか戀しかるらん」から採る。

【脇に足は止まらぬ】 我が惚れた一念で、何處へ嫁入つても尻が据はらぬ筈とのこと。(宵庚申の中)

【脇の人買】 「自然居士」のワキは人買。(傾城酒吞の四)

【側邊云々】 わきひら見ず、あたりかまはず無法なことを云ふ。

【脇へなる】 仙人の事は先づ脇へのけて置きの義。(浦島の一)

【脇まで詰め】 振袖の脇を詰める、娘から人妻にかわるしるし。

【和君】 おぬし、御身。

【吾妹子】 吾が妹、女を親しんで呼ぶ語。

【わきもこが寐亂髪云々】 奈良朝の宮女采女が君寵の衰へたのを悲しみ猿澤の池へ投身して死んだ、其れを悼んだ人丸の歌「わきもこが寐くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき」を採る。

【腋も詰めた】 人妻となると、衣服の腋の下を縫ひ詰めることを指す。

【脇役】 シテの相手役、ワキ。

【脇屋二郎義助】 新田義貞の弟、終始兄と共に千軍萬馬の間に功を奏した勇將。(千四犬の一)

【梓指】 梓指鳥居のこと、四つ足鳥居とも云ふ、二本の大柱と四本の袖柱とから成る鳥居の式。

【わくせき】 離齋の轉訛、ハラ／＼せか／＼すること。

【わぐため】 縮ること。

【簍の糸】 をだ巻の糸のこと。

【邂逅に云々】 稀に、たまさかに、古今「わくらはにとふ人あらばすまの浦に藻鹽たれつゝわぶとこたへよ」

【和光胴骨】 和光同塵にかける。(聖徳太子の二)

【譯ある事】 衆道の關係ある事。(伊豆日記の一)

【わけいかづち云々】 諸譯を知つた雷様と、上加茂神社の祭神、加茂雷神とをもちる。(千四犬の四)

【譯が悪い】 無粋なこと。

【分け來し端山繁山】 二人で過ぎて來た戀路のつらい峠、古今集に「筑波山はやま繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」とある。

【分里】 戀の諸分け(事情)に明るい里と云ふこと。

【譯立たず】 一分立たぬの義。

【分けて分かつたぬ涙】 體は二つに分れてゐるが涙は一つであるとの義。

【和氣の法橋】 和氣家は禁中興藥頭など勤め代々良醫が出て居る、法橋は法眼の次位、五位に準ずる。

【分け上る麓の道云々】 「分け上る麓の道は多けれど同じ高根の月を見るかな」の道歌による。

【わけの道】 色戀の道、諸分けの道。

【譯は京へも云々】 譯と云ふは、實は京へ上つて云々の意。(曾根崎心中)

【わけも】 番と譯とをもちる。(夕霧の上)

【譯もない事】 無分別なこと。

【譯もよき】 情事の諸譯が都合よく行くこと。

【縮げる】 結び整へること。

【若子】 稚子の美稱、此處は懐子、おぼんちなどの意。(淀鯉の上)

【和御前】 親しみを以て女を呼ぶ時の稱。

【俳優】 本來は歌舞伎等の役者に限らず能狂言師等が面白く手足を振舞ふて歌舞し、神や人を慰めたこと及び其人々の總稱である。

【わさ米】 早稲米。

【わさ田、おくて田】 早稲を作る田、晚稻を作る田の義。

【わざと結ぶや夢心云々】 わざと睡つたふりして餘裕掉々の有様を示す手段。(伊豆日記の一)

【山葵おろしに煮ぬきの玉子】 髭むちやの顔と滑らかな女の顔との喩。(女腹切の中)

【業物】 利刀のこと。

【わさ／＼】 うき／＼。

【わさ／＼わつさり】 浮き／＼あつさり。

【わしが位】位とは女郎の位、即ち直段のこと。(傾城酒吞の三)

【鷺國の鷺が羽虫同然】鷺國の鷺から見れば羽虫同然の奴等の略。(浦島の二)

【鷺の巢を鼠が狙ふ】及ばぬことの比喩。

【鷺の宮】武藏國鷺宮大明神、祭神天穗日命外二座。

【鷺の山】靈鷲山又は靈山のこと、別に註せり。

【私や百まで】「雀百まで踊り忘れぬ」の諺をもちる。(壽門松の下)

【忘れ貝】實物不詳とも、蛤に似て殻深く、褐色斑のある貝とも云ふ。

【忘れ草、忘れ貝】忘れ水とを合はせ、昔、住吉の三忘れと稱した、忘れ草は諸説あつて定かならず、忘れ貝は住吉海邊で取れる名物の貝、忘れ水は淺澤小野の細江の流れと云ふが、何れも確かではない。

【わせた】来た、やつて来た。

【わせて】おはす(御座)の略轉、來る事、「參られて」。

【わせなんだか】お出はなかつたか。

【わたい】呉れい。(博多の上)

【綿を取る】綿帽子を取る、綿帽子は眞綿を廣げて作つたもの。

【和田か秩父北條】和田義盛、秩父重忠、北條時政のこと。(加増の一)

【わだかまり】こゝのは横から奪ひ取る、着服する義。(歌念佛の下)

【私商】主人に内證で商ひすること。

【和田酒盛】當時琵琶に合はして謠ひしものらしき一曲「和田酒盛」の詞、「扱も其後」以下「朝比奈御酌候」までが其文句、但し師直を和田義盛に、鹽谷の妻を虎御前に、鹽谷を曾我十郎に擬してゐる。(兼好法師の上)

【渡さぬ立を吐出さば】渡さぬなど意地ばつて言ひ出さば。(山姥の四)

【私も一所に退きましよか】忙中の一閑筆、思はず失笑せざるを得ない。(冥途飛脚の下)

【轍の船云々】「轍船の急」とて、死に瀕する計りの苦しみを云ふ、莊子の外物編にある、車轍の中の船が水を請ふ問答の故事から來る。

【渡つた〜】大黒舞の唄として、源氏物語の帖の名を並べ立てた、大黒舞とは大黒天の風に装ひ、面を被り頭巾を着て人の門に立ち、歌ひ舞ふたものである。(淀鯉の上)

【和田津都】海の都。

【渡殿、細殿】何れも細長き廊下。

【渡邊の橋】往昔大阪の北、淀川に架せる橋、今の天満橋の邊であらうと云はれてゐる。(一心五戒の二)

【渡邊、福島】大阪の北部の古名。(忠信の三)

【渡邊箕田の源次武綱】頼光同四天王渡邊綱の子。(五人男の一)

【和田の一門九十三騎】和田一門百八十騎とも云ふ。(百日曾我の四)

【和田の大寄せ】和田義盛の大酒宴のことを云ふ。

【和田の新發意】南朝の忠臣和田賢秀、幼時剃髮和田新發意と稱して居た。

【綿の原】和田の原にもちる、和田の原は大海原のこと。(鳥原蛙合戦の五)

【和田の紋】和田義盛の紋どころ、木瓜を指す。(扇八

景の上)

【綿帽子】女の被り物、眞綿を摘みひろげて造る。

【わたもちの梵妻】鷹持のだいこく、生き大黒天と云つた粹詞、美人を生き辨天又はわたもちの觀音と云ふ如し。(蟬丸の四)

【渡らぬ先にとん〜】云々 正月七日七草の日に、七菜をまな板の上で叩く風になぞらへ、「唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に七草なづな云々」と雖す歌にもちる。(今宮心中の中)

【渡らぬ錦中絶ゆる】古今「龍田川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中や絶えなん」による。

【渡らひでは】渡らねばならない。

【渡り並】普通、通り一べんの義。

【渡並の客】普通一と渡りの客。

【渡りに舟】「如三子得一レ母、如三渡得一レ船、如三病得一レ醫、如三暗得一レ燈」(法華經藥王品)、好都合の譬。

【渡り物】舶來品。

【和丹兩家の典藥】和氣、丹波の兩醫家を云ふ。

【輪違ひ】 輪の半分重なり入り組んだ紋所。(五人兄弟)

【輪違ひ】 輪形を入れ違ひに重ねかける法、棒の術。(雪女の下)

【わぢ〜】 わな〜ぶる〜ふるふ良。

【和藤内三官】 主人公性爺郎成功、唐土にも和國にも無い豪の者、それで和唐内と名付けた作者の洒落か。(和藤内とも和唐内とも書く)(國性爺の一)

【民に油の若鼠】 民の中の油揚げの小鼠を見て、戯れかゝる狐のこと、辛抱し切れぬことの喩。

【民の鳥、網代の魚】 何れも免れ難き圍みの中との義。

【輪綱の紐】 輪のやうに縋ひ交ぜた紐。

【民結び】 民のやうに結ぶ事を云ふ、民とは繩を輪にして鳥獸の脚を引つけ捕へる事。

【わな〜】 ぶる〜慄ふ良。

【鰐口】 佛殿の簷先に懸けつるす銅製の具、參詣人參拜の前に打ち鳴らすもの、それから其喙を言囉す人口を鰐の口の恐ろしく大きいのに譬へる。

【鰐口】 危急を免れることを鰐の口から免れると云ふ。

【鰐口因幡云々】 以下、鰐、野猪、虎の猛獸惡魚の名を連ねる。(女護鳥の一)

【鰐の口】 鰐の口に臨んだやうな危急な場合、毒蛇の口と云ふに同じ。

【鰐の口なる露命】 九死に一生の義。

【和瀬の脚】 近江堅田の北、和通川の湖に注ぐ口。

【鰐百倍】 鰐が見込んだ熱心の尙ほ百倍との義。

【わびぬれば身を浮草の云々】 古今集小町が文屋康秀への返歌。

【わもじ】 和文字、和御寮、そなたの義。

【わや】 わや苦茶など云ひ、無茶のこと、關西地方の方言。

【わやく人】 俗に云ふ「わんぱく者」亂暴男、上方の詞。

【わやく者】 わんぱく者を云ふ上方詞、前註と同じ。

【わたら】 和郎の訛。

【藁を焼かれて】 煽り上げられる。

【藁を焚き】 惡口を言ふて焚き付けること、教唆すること。

【藁沓】 藁で作つた沓、草鞋の一種。

【妾が君に止めたり】 妾は淨瑠璃御前を指す。(冷泉節の下)

【妾語共云々】 この「妾」には意味がある、本編「解説」に詳述。(反魂香の上)

【蕨繩】 蕨の根莖から蕨粉を除いたあとの筋で作つた繩、よく水に堪へる。

【笑ひの内に劍を抜く】 外面如菩薩内心如夜叉の喩と同義。

【笑ふ顔は打たれぬ】 「笑ふ顔に矢たゝず」とも云ひ、愛想の善ひ人とは争はれぬと云ふ諺。

【圓座】 「わらふた」は圓座の古語、圓形の草褥。

【藁筆】 わらふみての略、藁しべにて作つた筆。

【童しい事】 子供らしき。

【童しい事】 兒戯にひとしきこと。

【童の手を切たる如く】 子供が惡戯に、我れと我が手を疵つけ泣くに泣かれぬと云つた良の喩。

【割符】 符を割つた形、狐を割つた形、何れも鍔の籠手の模様。

【割符の紋】 二郎兵衛の紋所か。(今宮心中の中)

【割符】 次項に註する。

【割籠小竹筒】 割籠は辨當箱の類、内に隔てがある故云ふ、小竹筒は竹製の酒を入れる器。

【わりなく通はん】 無理に、障害があつても無理に通ふやうな戀でなくばとの義。

【割符】 勘合の事、割札にて、後の證據の爲に交付する手形。

【割符も合ひ】 双方の話が符合すること、本來割符とは凡そ一尺位の細長い木又は竹の表へ證據となる事柄を認め、之れを二つに割り、一片を留め置き、他の一片を與へて後日の證據としたものである、それが俗語化したもの。

【悪い虫】 疳癪持、悪い疳癪の虫の義。

【悪業な】 悪てんごうの略、悪い洒落。

【悪業末社】 いたずらなお太鼓持、大盡を大神と見立て、取持をする者を末社と呼んだ。(雪女の上)

【割れ】互に勝負のないこと、持、分け、相撲の語。

【我れ落ちにきと云々】古今集僧正遍照の歌「名にめでて折れる計りぞ女郎花我れ落ちにきと人に語るな」を採る。

【我が戀路は糸なき三味よ云々】此歌は名取川と云ひ、紀海音の二つ腹帯にも採られて居る、「ヲ、それ二人と二人が名取川それぢや〜」で終る、種々の唄ひ物に襲用された著名な流行唄。(宵庚申の下)

【我からの】古今「蟹のかる藻に住む虫の我れからと」の藻を茂兵衛にもちる。(大經師の上)

【我ぞ籠れる若草に】「武藏野は今日はな焼きそ若草の妻も籠れり我れもこもれり」から採る。

【破れてぞ末に石漆】百人一首「瀬を早み岩にせかるゝ瀧川のわかれても末にあはんとぞ思ふ」により、石

が割れても石の漆で密着させるのと義。

【我には晴るゝ胸の煙り、こんくわいの涙云々】狂言「こんくわい」の末段の文を取る。(天鼓の一)

【我人に辛ければ人亦我に辛し】因果應報の理の諺。

【我等しき】我々ども、我等風情。

【我等は幫間】我々は御馳走のお相伴に預るとの義。

【割れ〜】別々になること。

【和郎】そなた、親しい間に使ふ詞。

【わゝしく】騒がしくの古語。

【わゝり付く】亂れ騒いで狂ひ付くこと。

【わんざくれ】わざくれのこと、戯れにすること、いたづら、悪戯のこと、加賀節で名高ひ「よしやわざくれ、身は、朝顔の、日かげ待つ間の花の色」などがある、此處のは「エ、まゝよ、比丘尼をやめて……」と云つた心意氣。(世繼の四)

【わんざん】無理難題言ひがかり、俗語、和諺(他人に雷同して罵るの轉訛。

【わんづか】僅か、六方詞。(加増の一)

# 附 録

# 近松戯曲年表

外題	上演年月	備考	年齢
(一) 赤染右衛門榮花物語	延寶八年一月		二十八歳
(二) 東山殿子日遊	天和元年一月		二十九歳
(三) つれづれ草	同 元年五月		同
(四) 龜谷物語	同 三年一月吉日		三十一歳
(五) 賢女手習並新曆(?)	貞享元年か二年頃		三十二三歳
(六) 世繼曾我	同 二年二月一日		三十三歳
(七) いろは物語	同 二年七月十五日		同
(八) 一心五戒魂	(?) 同 二年七月十五日	元禄十二年説あり	同

(九) 門出八島	(?)	同	二年頃か	同
(十) 出世景清		同	三年二月四日	三十四歳
(十一) 遊君三世相		同	三年五月吉日	同
(十二) 佐々木大鑑		同	三年七月十五日	同
(十三) 本朝用文章	(?)	同	末年か元祿初年	三十五六歳
(十四) 天智天皇		元祿二年	三月三日	三十七歳
(十五) 十二段		同	三年三月三日	三十八歳
(十六) 日本西王母	(?)	同	五年四月八日	四十歳
(十七) 松風村雨東帶鑑		同	七年三月三日	四十二歳
(十八) 文武五人男	(?)	同	八年三月六日	四十三歳
(十九) 釋迦如來誕生會		同	八年四月八日	同
(二十) 鎌田兵衛名所盃		同	八年十月十二日	同

元祿二年説あり

(二一) 義經追善女舞		同	九年九月九日	四十四歳
(二二) 頼朝伊豆日記		同	十年七月十五日	四十五歳
(二三) 百日會我		同	十年十月十三日	同
(二四) 當流小栗判官		同	十一年二月十四日	四十六歳
(二五) 源氏烏帽子折		同	十二年一月二日	四十七歳
(二六) 浦島年代記		同	十三年一月六日	四十八歳
(二七) 蟬丸		同	十四年五月六日	四十九歳
(二八) 天鼓	(?)	同	十四年頃か	同
(二九) 曾我五人兄弟		同	十四年十一月一日	同
(三十) 盛久	(?)	同	十五年頃か	五十歳
(三一) 大磯虎稚物語		同	十五年五月廿八日	同
(三二) 賀古教信七墓詣		同	十五年七月十五日	同



(三三)千載集	(?)	同	十六年頃か	五十一歳
(三四)最明寺殿百人上臈		同	十六年三月四日	同
(三五)曾根崎心中		回	十六年五月七日	同
(三六)薩摩歌		寶永元年	一月十五日	五十二歳
(三七)心中重井筒	(?)	同	元年四月十六日	同
(三八)雪女五枚羽子板(?)		同	二年一月か	五十三歳
(三九)用明天皇職人鑑		同	二年三月二日	同
(四十)傾城反魂香	(?)	同	二年八月五日	同
(四一)源義經將棊經		同	三年一月二十五日	五十四歳
(四二)本領曾我	(?)	同	三年三月二十七日	同
(四三)加増曾我	(?)	同	三年三月より以後か	同
(四四)心中二枚畫草紙		同	三年三月二十七日	同

寶永四年説あり  
『外題年鑑』に七月十四日とあれど  
或は寶永五年上演か  
本領曾我の後日

(四五)兼好法師物見車		同	三年五月五日	同
(四六)碁盤太平記		同	三年六月一日	同
(四七)曾我扇八景		同	三年七月十五日	同
(四八)吉野忠信		同	四年一月二十日	五十五歳
(四九)堀川波の鼓		同	四年二月十五日	同
(五十)緋縮緬卯月紅葉(?)		同	四年四月二十一日	同
(五一)卯月の潤色		同	四年六月一日	同
(五二)根元曾我	(?)	同	四年六月一日	同
(五三)丹波興作		同	四年六月二十四日	同
(五四)酒呑童子枕言葉		同	四年九月九日	同
(五五)心中萬年草		同	五年四月十六日	五十六歳
(五六)淀鯉出世瀧徳	(?)	同	六年頃か	五十七歳

寶永三年説あり  
元禄十一年説あり  
『外題年鑑』には元禄十三年四月とあれど

(五七)五十年忌歌念佛	同	六年一月二日	同	同
(五八)桙狩劍本地	同	六年九月九日	同	同
(五九)曾我虎ヶ磨	同	七年一月二日	同	五十八歳
(六十)今宮心中	同	七年一月二十三日	同	同
(六一)大原問答青葉笛	同	七年三月四日	同	同
(六二)百合若大臣野守鑑?	同	七年五月六日	同	同
(六三)心中双氷朔日 (?)	同	七年六月十六日	同	同
(六四)夕霧阿波鳴渡	同	七年七月二十四日	同	同
(六五)冥途飛脚	正徳元年三月五日		同	五十九歳
(六六)吉野都女楠	同	元年九月十日	同	同
(六七)弘徽殿鶉羽産家	同	二年五月五日	同	六十歳
(六八)姫山姥	同	二年七月十五日	同	同

(六九)傾城吉岡染	同	二年十一月二日	同	同
(七十)長町女腹切 (?)	同	二三頃か	同	同、六十一歳
(七一)天神記	同	三年二月二十五日	同	六十一歳
(七二)孕常盤 (?)	同	三年七月十六日	同	同
(七三)源氏冷泉節 (?)	同	三年秋冬の頃か	同	同
(七四)大織冠 (?)	同	三年十一月一日	同	同
(七五)相模入道千匹犬	同	四年四月八日	同	六十二歳
(七六)娥歌加留多	同	四年八月一日	同	同
(七七)嵯峨天皇甘露雨	同	四年十月十五日	同	同
(七八)癡靜胎内拵 (?)	同	五年一月二日	同	六十三歳
(七九)持統天皇歌軍法	同	五年八月一日	同	同
(八十)生玉心中	同	五年八月一日	同	同

『外題年鑑』には元祿十三年一月とあり

正徳二年説あり

正徳三年説あり

(八一)大經師昔曆	(?)	同	五年頃か	同
(八二)國性爺合戰	同	同	五年十一月一日	同
(八三)國性爺後日合戰	享保二年二月十五日	同	享保二年二月十五日	六十五歲
(八四)鎗權三重帷子	同	同	二年八月二十二日	同
(八五)聖德太子繪傳記	同	同	二年十一月十六日	同
(八六)山崎興次兵衛壽門松	同	同	三年一月二日	六十六歲
(八七)日本振袖始	同	同	三年二月二十二日	同
(八八)曾我會稽山	同	同	三年七月十五日	同
(八九)傾城酒吞童子	同	同	三年十月二十五日	同
(九十)博多小女郎浪枕	同	同	三年十一月二十日	同
(九一)善光寺御堂供養(?)	同	同	三年十二月十三日	同
(九二)本朝三國志	同	同	四年二月十四日	六十七歲

『外題年鑑』には寶永三年九月とあり

享保四年説あり

(九三)平家女護鳥	同	同	四年八月十二日	同
(九四)傾城島原蛙合戰	同	同	四年十一月六日	同
(九五)井筒業平河内通	同	同	五年三月三日	六十八歲
(九六)雙生隅田川	同	同	五年八月三日	同
(九七)日本武尊吾妻鑑	同	同	五年十一月四日	同
(九八)心中天網島	同	同	五年十二月六日	同
(九九)津國女夫池	同	同	六年二月十七日	六十九歲
(百)女殺油地獄	同	同	六年七月十五日	同
(百一)信州川中島合戰	同	同	六年八月三日	同
(百二)唐船嘶今國性爺	同	同	七年一月二日	七十歲
(百三)心中宵庚申	同	同	七年四月二十二日	同
(百四)關八州繫馬	同	同	九年一月十五日	七十二歲

附記

外題の年表は今のところ主として『外題年鑑』に據るより仕方がない、然  
かし明瞭に誤謬であると知れたものは改めて置いた。  
誤りとは思ふが有力な反證の見付からぬものは、依然『年鑑』のまゝに掲  
記した、やがて考究の上改めねばなるまい。  
年代の疑はしいもの、異説あるものなどには、(?)を附して考證學者の  
高教に待ち、濫りに自家の獨斷を加へなかつた。

近松戯曲年表 終

外題索引

(五十音順)

但し( )内の數字は全集の卷數とページ數

赤染右衛門榮華物語	(十五。三五三)	遊君三世相	(十。三九三)
生玉心中	(十五。四五七)	一心五戒魂	(十五。一一)
井筒業平河内通	(七。一)	今宮心中	(四。四一七)
いろは物語	(三。二二三)	卯の潤色	(十二。五〇九)
浦島年代記	(六。一〇一)	大磯虎稚物語	(九。二七九)
大原問答青葉笛	(七。三八七)	女殺油地獄	(八。四七一)
賀古教信七墓詣	(十三。一八九)	加増曾我	(七。二九七)
門出八島	(十。三三九)	娥歌加留多	(十。一一)
鎌田兵衛名所盃	(九。三三七)	龜谷物語	(十三。三八七)

關八州繫馬	(一)	九三	傾城島原蛙合戰	(一)	三二九
傾城酒吞童子	(十一)	八五	傾城反魂香	(五)	一
傾城吉岡染	(四)	一一三	兼好法師物見車	(七)	二〇一
源氏烏帽子折	(十五)	二九七	源氏冷泉節	(三)	五三一
賢女手習並新曆	(一)	四三三	弘徽殿鶉羽產家	(十三)	二七九
國性爺合戰	(三)	一	國性爺後日合戰	(十四)	一二三
五十年忌歌念佛	(十一)	四七五	碁盤太平記	(七)	二四九
姬山姥	(九)	一	根元會我	(十一)	一八七
最明寺殿百人上藤	(二)	一一一	嵯峨天皇甘露雨	(十二)	二七九
相模入道千匹犬	(三)	一一五	佐々木大鑑	(三)	三五五
薩摩歌	(九)	四七一	十二段	(十一)	二五七
聖德太子繪傳記	(五)	二六三	釋迦如來誕生會	(十三)	一

出世景清	(二)	二七五	酒吞童子枕言葉	(十一)	一
信州川中島合戰	(八)	一	心中重井筒	(二)	四一七
心中天網島	(一)	五四九	心中二枚書草紙	(十三)	四二七
心中萬年草	(一)	四八九	心中双氷朔日	(十四)	四〇五
心中宵庚申	(十四)	四七一	蟬丸	(五)	一〇三
善光寺御堂供養	(十四)	三三三	千載葉	(十五)	三九五
曾我扇八景	(十)	九一	曾我會稽山	(四)	一
曾我五人兄弟	(十二)	九五	曾我虎ヶ磨	(十三)	九九
曾根崎心中	(三)	四一三	大經師昔曆	(六)	四四五
大織冠	(七)	一一三	唐船嘶今國性爺	(二)	一八七
當流小栗判官	(四)	二九三	丹波與作	(四)	四七七
持統天皇歌軍法	(十一)	三二五	津國女夫池	(八)	九九

つれく草	(十一。四二九)	天鼓	(九。一九五)
天神記	(三。一)	天智天皇	(五。三六一)
長町女腹切	(五。四二五)	日本西王母	(八。二八七)
日本振袖始	(十四。一)	博多小女郎浪枕	(十三。四七五)
孕常盤	(八。二〇一)	東山殿子日遊	(六。三九九)
緋縮緬卯月紅葉	(十二。四五五)	百日曾我	(三。二七一)
雙生隅田川	(十二。一八一)	際靜胎内裙	(十。一八三)
文武五人男	(四。三五七)	平家女護島	(五。一六七)
堀川浪の鼓	(三。四七七)	本朝三國志	(十五。九五)
本朝用文章	(八。四一七)	本領曾我	(十四。二三七)
松風村雨束帶鑑	(六。一)	源義經將棊經	(十五。一九九)
冥途飛脚	(二。四七九)	絶時劍本地	(九。八九)

一六

盛久	(十。二八一)	山崎與次兵衛壽門松	(五。四八一)
日本武尊吾妻鑑	(十二。三六五)	鎗權三重帷子	(七。四四七)
雪女五枚羽子板	(十二。一)	夕霧阿波鳴渡	(十。四六三)
百合若大臣野守鑑	(二。三三三)	用明天皇職人鑑	(一。二二一)
義經追善女舞	(八。三六一)	吉野忠信	(六。二六一)
吉野都女楠	(四。二〇三)	世繼曾我	(六。二〇三)
淀鯉出世瀧徳	(九。三九一)	頼朝伊豆日記	(六。三三五)

外題索引 終

附録木版畫目次

第一卷	天網島の『小春』	菊池契月氏
第二卷	冥途飛脚の『梅川』	北野恒富氏
第三卷	國性爺の『錦祥女』	西山翠嶂氏
第四卷	丹波與作の『關の小萬』	山村耕花氏
第五卷	蟬丸の『蟬丸』	菅楯彦氏
第六卷	松風村雨の『松風』	中澤弘光氏
第七卷	世繼曾我的『朝比奈』	西村五雲氏
第七卷	大經師の『おさん』	岡田三郎助氏
第七卷	鎗の権三の『やぶら』	鍋木清方氏
第八卷	女殺油地獄の『興兵衛』	山口草平氏

第九卷	姫山姥の『山姥』	小川芋錢氏
第十卷	夕霧の『夕霧』	島成圓氏
第十一卷	酒吞童子の『酒吞童子』	玉村方久斗氏
第十二卷	雪女の『雪女』	上村松園氏
第十三卷	博多小女郎の『毛剃』	野田九浦氏
第十四卷	宵庚申の『ち千代』	木谷千種氏
第十五卷	五戒魂の『文覺』	富田溪仙氏
第十六卷	曾我的『虎御前』	石川寅治氏
	以上	十八葉

解説 大近松全集第十六卷 完結



大近松全集  
第十六卷  
附 奧

大正十四年九月二十八日印刷  
大正十四年九月三十日發行

非賣品

著者 木谷正之助

發行者 東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地 國松

印刷者 東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地 松平末五郎

印刷所 東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地 文雅堂印刷所

發行所

東京市麴町區飯田町二丁目  
六十八番地文雅堂內  
振替東京四〇五二四番

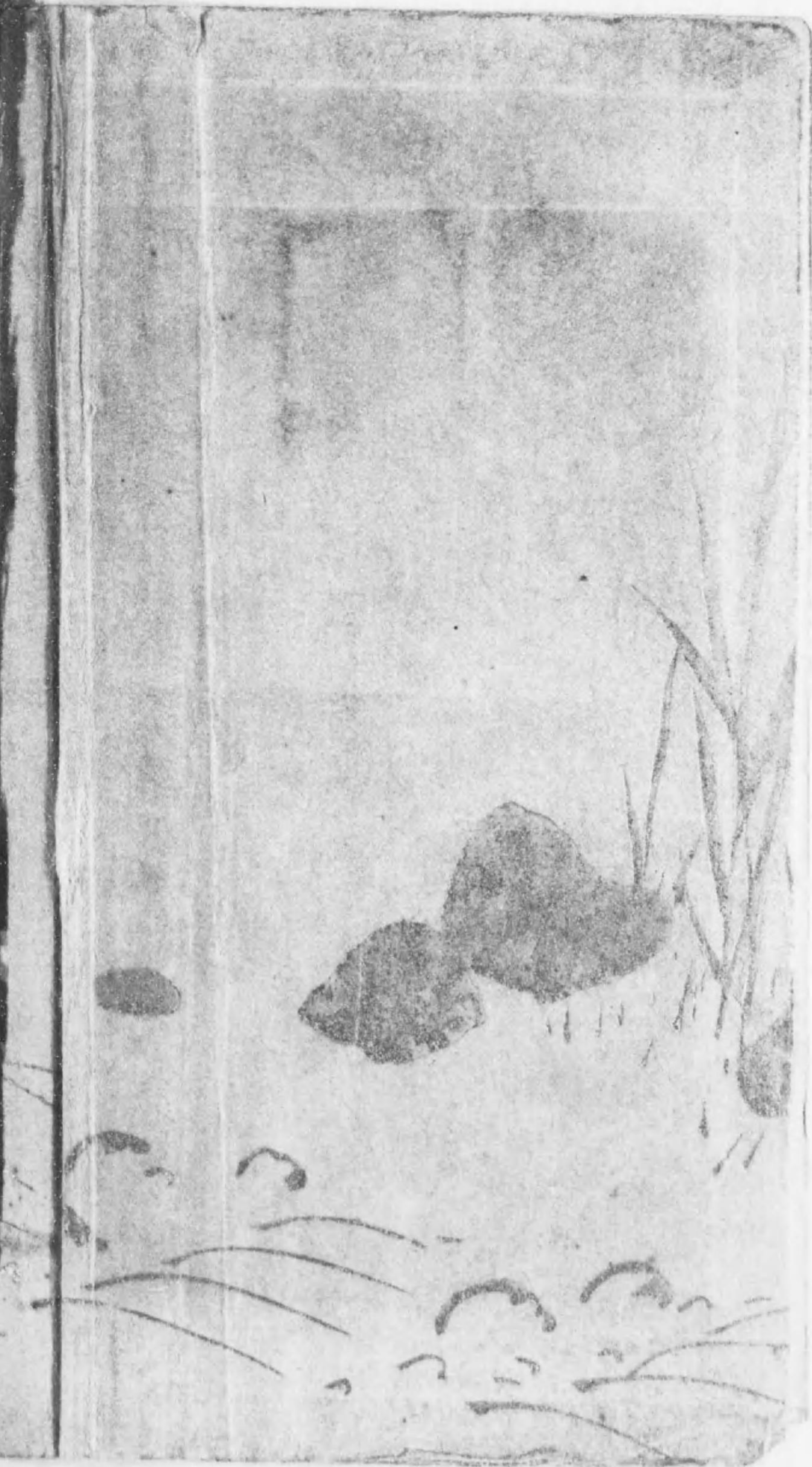
大近松全集刊行會

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including names like '木谷正之助' and '松平末五郎'.



505

36



終

